幼・保・小 交流会	（３）幼稚園・保育園との連携・交流
施設種別	千葉市立おゆみ野南小学校（小学校）　（作成者職名）　１年生担任
学校概要	学校児童数 605 人（うち、１年生 73 人）１年生：３クラス 就学前の幼稚園、保育園数：24 園 主な就学前幼稚園、保育園 千葉明徳短期大学付属幼稚園 13 人、おゆみ野南幼稚園 13 人、ふたば保育園 10 人 　閑静な住宅街にある小学校。近隣に小学校や幼稚園、保育園などが多数あり、就学前の園の数が多い。10 年程前までは、1000 人を超える大規模校だったが、年々児童数が減少し、６年生のみ４クラスで、他の学年は３クラスである。
＜実施時期＞	令和２年 11 月 19 日～30 日 ・11 月 19 日　おゆみ野南小学校１クラス 28 人と、ふたば保育園 19 人 ・11 月 20 日　おゆみ野南小学校１クラス 28 人と、すきっぷ保育園７人・アンファンジュール保育園５人 ・11 月 25 日　おゆみ野南小学校１クラス 28 人と、おゆみ野南幼稚園 34 人 ・11 月 27 日　おゆみ野南小学校１クラス 28 人と、おゆみ野南幼稚園 34 人 ・11 月 30 日　おゆみ野南小学校１クラス 28 人と、おゆみ野南幼稚園 34 人

＜幼児期の終わりまでに育って欲しい姿に繋がる部分＞

協同性、思考力の芽生え、自然との関わり、言葉による伝え合い

＜活動のきっかけ＞

・幼稚園のときに小学生と交流して楽しかった。幼稚園や保育園と今年も交流して、小学校は楽しいところだということを伝えたい。
・生活科の学習で作った秋のおもちゃを幼稚園や保育園の皆に遊んでもらいたい。

＜活動のねらい＞

・児童・幼児の発達や学びの連続性を確保する。
・交流を楽しみ、年少者への接し方を考え、思いやりの心を育てる。（小学校）
・交流経験を通して小学校への親しみをもち、入学前の期待がもてるようにする。（幼稚園・保育園）

＜経験する内容＞

・園児に楽しんでもらうためには秋の遊びをどのように工夫すればよいのかを考え、秋の自然の物でおもちゃを作ったり、遊びのルールを決めたりする。
・来てくれた園児との交流を通して、年少者への接し方を考えて対応することを学ぶ。
・お店屋さんを開くことで、ルールを説明したりお客さんの意見を聞いたりすることを経験する。

＜新型コロナウイルス感染症に対する活動の工夫＞

・例年より規模を縮小し、小学校側も１クラス、幼稚園・保育園側も少人数で対応し、大人数で集まることを避けた。
・広いアリーナを使用することで密集しないようにした。
・ペア活動ではなく、ワークショップ形式にして密接しないようにした。

＜単元の流れ＞　全 18 時間

〇校庭や学校区にある公園を歩きながら、周りの様子を観察して季節の変化に気付く。（２時間）

〇もう一度公園を訪れて秋の自然をより深く味わうとともに、自分たちがしてみたいことを考え、公園で秋の自然の特徴を生かして遊ぶ。（２時間）

〇秋の公園で見付けたもの、面白かったこと、もっとしてみたいことを発表する。（１時間）

〇秋の自然物を使った遊びや飾りを考え、つくりたいものをつくる。（６時間）

〇「あきランド」に園児を呼んでどんなことをしたいか話し合う。（１時間）

〇「あきランド」に園児を迎える準備をする。（３時間）

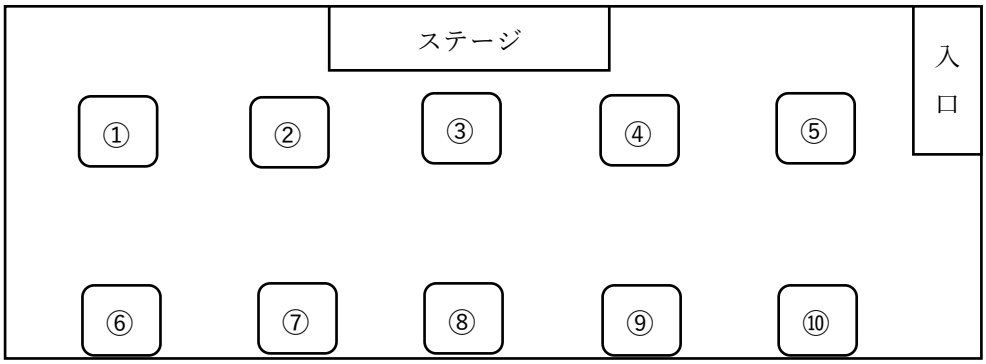
◎園児たちを招待して遊ぶ。（２時間）

〇秋の思い出を振り返る。（１時間）

＜活動の内容＞

・体育館に 10 個のブースを作り、生活科で行った秋の遊びをお店にした。ドングリやマツボックリ、身近な素材で作った遊びを園児に楽しんでもらった。

【会場図】



【お店屋さんの実際】※写真は令和２年度と３年度のものを使用しています。

【落ち葉釣り】

【落ち葉トランプ】

【ドングリめいろ】

【ドングリピタゴラスイッチ】

【ドングリごま】

【ドングリお箸移し】

【ドングリくじ】

【ドングリすごろく】

【ドングリビリヤード】

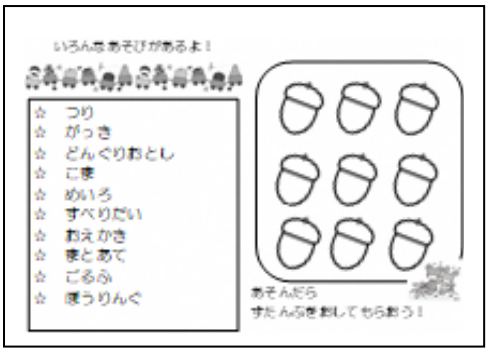
【ドングリ的当て】

【マツボックリボウリング】

【ドングリけん玉】

・お店に行った分だけスタンプをカードに押してもらえるスタンプラリー形式とした。

【スタンプを押す様子】



【スタンプラリーのシート】

＜活動でみられた子供の姿＞	＜環境構成・教材や保育者の援助等＞
・子供たちは、ルールを守りながら交流を楽しんでいた。 ・お店に来た園児にルールを説明したり、遊びのこつを伝えたりして、優しく接することができた。 ・スタンプラリー形式にしたことで、園児たちはいろいろなお店を楽しそうに回っていた。 ・ペアでの活動は行わなかったので、個人の名前を覚えるなどの繋がりはなかったが、園児たちに楽しんでもらったことは、小学生にとって達成感があった。 ・久しぶりに会う幼稚園の先生に喜ぶ児童もいた。	・自分たちが遊ぶために作った秋のおもちゃを園児が楽しめるようにするにはどうしたらよいかを子供たちに投げかけ、相手意識をもっておもちゃを作ったりルールを考えたりできるようにした。 ・子供たちが密集しないように各ブースをできるだけ離して設置した。 ・保育者は、各ブースを回りながら、遊んでいる子供たちの補助をした。
絵や言葉でルールを説明したり実際にやって見せたりして相手に伝わるように工夫できた。	広いアリーナを使用することで、ソーシャルディスタンスを保って活動できるようにした。
 【説明する様子】	 【アリーナの様子】

＜成果と今後の課題＞

・小学生も園児も充実した時間を過ごすことができた。また、この交流会のために準備をしたり、遊びを園児向けに作り替えたりする活動も生活科の学習として有意義であった。今後も生活科「あきとなかよし」の単元のゴールとして交流会を設定していきたい。

・コロナ禍のため、ペアで活動はしなかったのでお互いの名前を覚えるなどの繋がりがなかった。誰と交流したかという相手意識がより強くもてるように、ペアで案内するなどの活動を取り入れられるとよかった。

・コロナ対策で手紙やお便り交換といった間接的な交流をしているが、コロナが落ち着いてきたら交流会以外にも一緒に遊んだり学校を案内したりと直接的な交流をする機会を設けられるように検討してきたい。

＜カリキュラムコーディネーターのコメント＞

○学校の特徴と取り組みの工夫

おゆみの南小学校は全校児童数 605 人（1 年生 73 人）と一般的な規模の小学校です。近隣には、小学校や幼稚園、保育所など多数あり、文教地域の小学校と言えましょう。コロナ禍の拡大で例年実施してきた「交流会」が実施できないかも知れないという事態の中でも、小学生になった時の経験として「交流会は楽しく、小学校も楽しいところだ！」ということを伝えるための実施でした。

①実施回数、実施時期、参加園の人数の工夫が体験を豊かにした！

従来、実施していた交流会では小学校側からは 1 年生全員、近隣の幼稚園や保育園が全員、一同に会して交流をするといったものでしたが、今回は実施期間を設けて、会を 5 回に分けて実施し、参加する幼稚園や保育園の子どもたちの人数制限をするなどの工夫した点が注目に値します。この発案は参加する子どもたちにとっては密が避けられ、少人数のためじっくりと小学校の先輩と遊ぶ経験ができるメリットも生み出しました。教員のアイディアと実行力とそのホスピタリティにも敬服しました。

②経験する内容は季節感、幼児にも楽しめる工夫の交流会！

どんぐり、落ち葉といった幼稚園や保育園でも身近に使える素材を使うことで、幼児にも手軽で、楽しい経験できるように工夫がなされ、テーマも「秋ランド」と名付け、季節に親しみを持って幼児たちが遊びに取り組める配慮がなされていました。実際の幼児に提供された遊びは、1 年生の生徒たちが「自分たちが面白くてもっとしたいこと！」というコンセプトで交流会の遊びを主体的に準備したことが「落ち葉釣り」「落ち葉トランプ」「どんぐり迷路」「どんぐりピタゴラスイッチ」と子どもの楽しさと秋の季節感の学びが満載のプログラムでした。写真からその楽しさが伝わってきました。

③手間暇かけた企画、手間暇かけた交流会の実施！

今回の交流会の単元は全 18 時間を掛けて企画・運営されたことに驚かされました。小学校 1 年生にとって負担にならないようにスモールステップの単元内容を企画し、自分たち秋の公園での体験をきっかけに「楽しかったこと」「もっとしてみたいこと」を単元の中心に据えたのは、子どもたちの主体性を本当に大切にした企画だと思うと、その熱意と実行力に感銘を受けました。

○さらなる展開に向けて

コロナ禍で子ども同士の繋がりを深めたり名前を覚えたりといった活動は実現できませんでしたが、今後も今回の子ども主体の運営やアイディアを更に活かしながら、交流会をする児童生徒にとっても、交流会に招かれて体験する幼児たちにとっても心から「楽しかった」と感じ、今後も「一緒に遊びたい・学びたい」といった人への信頼感を培うような企画の推進を願っています。

【冨田久枝／とみた　ひさえ】千葉大学教育学部特命教授、博士（心理学）、カウンセリング修士、臨床発達心理士等。22 余年にわたり、幼稚園教諭として勤務。千葉大学では実務家教員として保育者養成に携わり、研究テーマは「保育者の援助スキルの研修」や「持続可能な社会を創る保育内容」など保育実践の研究、一方で保育臨床に関する研究や「保育カウンセラー」の養成も行っている。著者は『子どもはせんせい』（北大路書房、単著）、『改訂新版　保育カウンセリングへの招待』（北大路書房、共著）、『保育現場で使えるカウンセリングテクニック』（ぎょうせい、共著）、『持続可能な社会をつくる日本の保育』（かもがわ出版、共著）他。